

自己の存在価値がキャリア行動に及ぼす影響について

A53162 森夕利子

自己の存在価値とは、高井（1998）によれば、他者との関係性（家族や友人、様々な人との交流）の中で、相談される、喜ばれる、感謝されるなどの他者からの受容によって感じるができるという。「私は、周囲の人たちにとって必要な存在であると思う。」、「周囲の人にとって、私は何らかの役に立っていると感じている。」、「毎日の生活の中で、自分の役割を自分なりによく果たしていると思う。」などである。

【目的】

本研究では、自己の存在価値を認識しているかどうか、その後の進路・生き方に対して活動を行えているか、という点を検証する。また、男女での違いを検討していく。

【方法】

調査対象者は私立大学の在学生の2年生から4年生の178人を対象に調査用紙を配布した。2008年7月中旬に授業時間を借りて調査用紙を配布した。

尺度は、①生きがい感スケール（近藤・鎌田,1998）②役割受容尺度（三川,1990）③成人キャリア成熟尺度（坂柳,1999）④自己効力感尺度（浦上,1994）から抜粋したものと自作したもの（キャリア行動と呼ぶ）の4つを使用して測った。①と②で存在価値を測り、③と④でキャリア行動（自己効力感尺度の進学か就職かを定めることなど）を測った。

【結果】

①「生きる意欲が高いほどキャリア行動が高い」について、男性 $r = 0.60$ ($N=47$, $p < .001$) 女性 $r = 0.66$ ($N=54$, $p < .001$) であった。②「自己の存在価値（生きがい感スケールの存在価値下位尺度から）が高いほどキャリア行動が高い」について、男性 $r = 0.04$ ($N=47$, $p = n.s.$) 女性 $r = 0.37$ ($N=54$, $p = n.s.$) であった。③「自己の存在価値が高いほどキャリア行動が高い」について、男性 $r = 0.37$ ($N=47$, $p < .05$) 女性 $r = 0.56$ ($N=54$, $p < .001$) であった。④男女別では男性は平均値 80.19 で $SD22.97$ 、女性は平均値 88.5 で $SD20.03$ で男性より女性の方がキャリア行動が高かった。

【考察】

他者との様々な関わり合いや活動を通して、自己を評価し受け入れることができないと、自己の存在価値を得ることはできない。しかし、得ているだけでは意味がなく、自分で自分のこれからの生き方や人生に目標や、目的などを持って過ごしていないと、前向きで積極的な行動を起こすことはできないと考えられる。それがキャリア行動となって現れて、充実した有意義な人生を送れるようになることにつながると考えられる。

表1 男女別の生きがい感スケール・成人キャリア成熟・キャリア行動の相関

	M 男	女	SD 男	女	①男	女	②男	女	③男	女
①存在価値	20.83	22.87	4.43	4.22	-	-				
②意欲	21.26	22.57	4.6	4.55	0.53***	0.76***	-	-		
③関心性	29.23	30.74	7.72	5.14	0.17	0.48***	0.52***	0.42**	-	-
④キャリア	80.19	88.5	22.97	20.03	0.37*	0.56***	0.60***	0.66***	0.68***	0.58***
					p<.05*		p<.01**		p<.001***	